

中部朝刊 2019/08/31(土)

# 支える誰か いれば……

## 目をそらさないで

### 「多胎児ははぐくむ」編 1

「命を奪った」と、これから長い未来を奪ったと、ごめんねという気持ちです。涙声だった。

7月、名古屋高裁。1号法廷の証言台に立つ松下國理被告(31)の姿を初めて見た。亡くなった次男への思いと後悔を小さな声ながら、しっかりと陳述した。開廷前列ができたほど傍聴希望者が多く、双子や三つ子を育てる親も被告の様子を見守った。

愛知県豊田市の2018年1月、生後11カ月の三つ子の母親が、次男を床にたたきつけ、死なせた。名古屋地裁岡崎支部は今年3月、母親の松下被告に対し、傷害致死の罪で懲役3年6月の実刑判決を言い渡した。弁護側は「三つ子の子育ての過酷さを考慮すべきだ」などとして控訴。高裁で審理が続いている。

裁判資料などによると、3人は17年1月に生まれた。夫や両親、自身の兄弟も喜んだ。育児の手伝いを求めて奥家に帰ったが、飲食店を経営す

## 過酷な子育て 次男死なせる



三つ子はミルクを飲む時間も量もバラバラだった(写真はイメージ)＝大西岳彦撮影

る両親は多忙で頼めなかった。3人はミルクを飲む時間も量もバラバラだった。授乳し、おむつを替え、泣く子をあやす……。それだけで一日が過ぎ、寝る時間もない。三

つ子の誰かが常に泣いていて。5月に夫が半年間の育児を取得した。自宅マンションに戻ったものの、夫の不慣れな世話では子どもたちが泣き出すため、こちらも頼れなくな

った。一番の心配は次男だった。ミルクの吐き戻しが多く、体重が増えない。泣き出すと止

まらぬ。やがて、その手に対し苦手意識が芽生える。秋ごろには、泣き声を聞くと動悸や吐き気が止まらなくな

った。11月、夫が育児を終えて職場復帰すると、育児と家事を全て一人ですることになった。それから2カ月後、事件は起きた。

厚生労働省の人口動態調査によると、出生数に占める双子以上の「多胎児」は1975年には約10%で、2017年は2.01%。不妊治療の普及が影響しているとの研究者の指摘もある。豊田市の事件から、多胎児特有の子育ての難しさを、きりきりの状態で子どもと向き合う母親の姿が浮かんできた。どうしたらいいのか。育児の現場を歩き、考えた。

法廷には、一審から傍聴を続けるNPO法人「まぶ多胎ネットワーク」の理事長、糸井川誠子さんがいた。24年前に三つ子を出産している。当時の育児日記を見せてもら

た。「精神状態が最悪で何も受け入れられない。苦しい涙腺がぐちゃぐちゃになる。でも頑張れない。疲れた。そんな自分が悔いなくて嫌になる……」。子の成長の喜びとともに、育児の不安、驚愕が、細かく丁寧な手で書かれていた。奥母と夫が子育てに協力してくれたという。それでも、授乳は一日24回以上、睡眠時

この連載は堀川貴代が担当します。

### 筆者プロフィール

記者18年目。医療、介護、子育てなど社会課題分野を主に取材してきた。今年4月から中部報道センターに勤務。共働家で一歳の娘がいる。

ご意見や情報をお寄せください。〒453-6109名古屋市中村区平池町4の60の12 毎日新聞中部報道センター「目をそらさないで」取材班。メールはc.repor tage@mainichi.co.jp

(c)毎日新聞社 無断転載、複製を禁止します。



中部朝刊 2019/09/02(月)

# 一時預かり支援諦め

## 目をそらさないで

「多胎児をはぐくむ」編

3

双子や三つ子を育てる家庭を取材すると、奥家の手助けを受けている所が多いように感じた。しかし、核家族化の進行は今に始まった話ではない。古里を離れ、夫婦で子育てをする名古屋市の会社員、佐々英克さん(43)の家を6月に訪ねた。

「何とか、何とか回してあります」と表現した。平日は、美沙さん一人が三つ子の面倒をみる。3人ともよく笑い、人なつこく、穏やかな性格だ。上手に歩けるようにもなった。できるなら、屋間は外で遊ばせてやりたい。でも、公園に行くところとも別方向へ出ていこうとする。少しも目を離せないから怖い。

「夜担当」の英克さん(36)と小学1年の長女(7)に1歳半の三つ子の女の子が暮らす。今年4月、英克さんの仕事の事情で関西から引っ越してきた。近隣に知人はおらず、夫婦2人の子育てを

「何とか、何とか回してあります」と表現した。平日は、美沙さん一人が三つ子の面倒をみる。3人ともよく笑い、人なつこく、穏やかな性格だ。上手に歩けるようにもなった。できるなら、屋間は外で遊ばせてやりたい。でも、公園に行くところとも別方向へ出ていこうとする。少しも目を離せないから怖い。

## 窓口さえ行く余裕なく

「何とか、何とか回してあります」と表現した。平日は、美沙さん一人が三つ子の面倒をみる。3人ともよく笑い、人なつこく、穏やかな性格だ。上手に歩けるようにもなった。できるなら、屋間は外で遊ばせてやりたい。でも、公園に行くところとも別方向へ出ていこうとする。少しも目を離せないから怖い。



三つ子たちの1人を抱え、2人をブランコに乗せて公園で遊ばせる佐々美沙さん(名古屋市中村区)で6月、細川貴代撮影

「何とか、何とか回してあります」と表現した。平日は、美沙さん一人が三つ子の面倒をみる。3人ともよく笑い、人なつこく、穏やかな性格だ。上手に歩けるようにもなった。できるなら、屋間は外で遊ばせてやりたい。でも、公園に行くところとも別方向へ出ていこうとする。少しも目を離せないから怖い。

「何とか、何とか回してあります」と表現した。平日は、美沙さん一人が三つ子の面倒をみる。3人ともよく笑い、人なつこく、穏やかな性格だ。上手に歩けるようにもなった。できるなら、屋間は外で遊ばせてやりたい。でも、公園に行くところとも別方向へ出ていこうとする。少しも目を離せないから怖い。

ご意見や情報をお寄せください。〒453-6109名古屋市中村区平池町4の60の12 毎日新聞中部報道センター「目をそらさないで」取材班。メールはc.r.eportage@mainichi.co.jp

(c)毎日新聞社 無断転載、複製を禁止します。

中部朝刊 2019/09/03(火)

# 訪問看護に助けられ

## 目をそらさないうで

「多胎児をはぐくむ」編

4

双子や三つ子は小さく生まれ、母親と離れて新生児集中治療室に入ることが多い。自宅に戻っても、うまく母乳が飲めなかったり、体重が増えなかったりする。多胎児の母親数人から「訪問看護に助けられた」と聞いた。紹介され、愛知県みよし市にある「こども訪問看護ステーションmom（ママ）」を訪ねた。看護師が、医師の指示書をもとに、自宅を訪ねてケアする。介護保険制度で高齢者が利用する印象が強いが、子どもも医療保険で利用できる。

## 専門家伴走「頑張れた」

出産前、強い不安を感じていた。病院から勧められ、退院後に週2回、双子が1歳になるまで利用した。助産師は家に来ると、体調を確認し、もく浴や授乳をする。赤ちゃんが泣いても手伝いを求められない。母親は助産師に不安や悩みを相談したり、体を休めたり。双子の育児から一時的に解放され、長男とゆっくり過ごせた。

「発達について正しい知識があり、私の体調を理解してくれる専門家が綱渡りの育児に伴走してくれた。『もうダメ』と思った時は、あと数日で来てくれると思うと頑張れた」と話す。双子は3歳になり、6歳の長男と一緒に子育て中だ。

多胎児を対象とする訪問看護専門家はまだまだ珍しい。医師や看護師にも訪問看護で退院後の母子を支えるという認識が薄いためだ、という指摘もある。豊田市の事件でも、母親は保健師から訪問看護を紹介されていた。しかし、自分には必要ないと断っていたという。「あの時、内容が正しく伝わってれば、お母さんが苦しむ時間は絶対に短くできたと思う」とママの近藤さんは悔やむ。

状況に応じ、退院後の多胎児の家庭を看護師や助産師が訪れ、継続的に支える。虐待予防の観点から、こんな仕組みが層求められると感じた。



双子の男児がいる家庭を訪問し、体調や発達の状態を確認する助産師＝愛知県豊田市で7月、細川真代撮影

ご意見や情報をお寄せください。  
〒453-6109 名古屋市中村区平池町4の60の12 毎日新聞中部報道センター「目をそらさないで」取材班。メールはc.r.eportage@mainichi.co.jp

113116

(c)毎日新聞社 無断転載、複製を禁止します。

中部朝刊 2019/09/04(水)

# 孤独な母、作らない

## 目をそらさないうで

「多胎児をはぐくむ」編

5

5月下旬、名古屋市長昭したヘルパーの養成や、和区の名古屋第二赤十字子ども一時預かりなど病院で、双子や三つ子を育てる家族の交流会があった。企画したのは「あいち多胎ネット」。愛知より柔軟にニーズに応じたサポートができる方、つ子の母親が生後11カ月、強い存在だと気づいた。の次男を死なせた事件を受け、設立された。

理事長の日野紗里恵さん(51)も三つ子の母親だ。「事件の原因は母親が孤独になったこと」と分析し、行政などさまざまな機関との連携に力を入れようとしている。新入りに、双子や三つ子などがある家庭の支援に特化

## 芽吹き始めた支援の輪



事件現場近くの公園。テントには親子が集い、話合う姿があった。愛知県豊田市で6月、細川貴代撮影

子さん(51)は「県内の多胎家庭の半分以上は把握できていないと思う」。事件のあった豊田市のマンション周辺でも、変化があった。「三つ子が近所にいることを知らなかった」と振り返る公務員、安川和博さん(40)と綾子さん(38)夫妻は現場から5分ほどの所に住む。事件後、近所の和合公園で毎月1回、地域の家族や子どもたちが交流する企画「Parklife(パークライフ)」を始めた。テントが目印で、誰もが好きな時に訪れ、自由に過ごせる。「一人一人が関心を広く持つ、関わりを増やせる。自分たちからでも、少しも隣近所の人に手を差し伸べられる環境になればいい」

6月末に訪ねた。親子が笑顔で話らい、子どもたちが元気に駆け回っていた。事件のあったマンションが見える。この子たちの元気な声が、孤独な育児に悩む人に届いてほしい――強く願った。

豊田市の事件の母親は行政や医療機関に度々SOSを出していたが、職員らはそれを見逃さなかったことも浮かび上がった。市の外部検証委員会(市側)に多胎児支援の重要性が認識されて

この連載は細川貴代が担当しました。

◇ おわり

ご意見や情報をお寄せください。〒453-6109名古屋市中村区平池町4の60の12 毎日新聞中部報道センター「目をそらさないで」取材班。メールはc.r.eportage@mainichi.co.jp

(c)毎日新聞社 無断転載、複製を禁止します。